

評論シリーズ・三

婦人戦線に立つ I

高群逸枝

目次

婦人戦線に立つ	五
アナーキズム文芸の態度	二二
我国マルクス婦人の頭脳拝見	二九
一 山川菊栄	
二 平林たい子	
三 神近市子	
四 中本たか子	
家庭否定論	六〇
無政府主義の目標と戦術	七〇
プロ婦人と男性批判	八三
無政府主義と性の処理	八七
無政府主義問答	九四

婦人戦線に立つ

わが国における婦人自覚史は、かの『青踏』運動に、最初の頁を起こした。それは、誰も知るように、婦人の「個人的自覚」によつたもので、その後、いく星霜かを経て、いまここに我々によって、婦人の「社会的自覚」にもとづく、画時代的の運動が、起こされようとするのだ。

すなわち、我々のこの運動は、婦人自覚史の、第二の頁をそむべきものであり、このことに対する、強き自覚と、大なる抱負とは、我々をして、しばし無限の感なき能わざらしめる。

前途は遠い。果して我々によつて、いくばくのことか、成しとげられようか。それは知らない。ただ我々は、弾丸の前を、あるいはまた荒涼たる凍土を、「行く」ということを、もはや唯一の「意志」としている。

労働者が真に労働者として自覚し、農民が農民として自覚した時、彼等は、すべての強権と彼等との対立を発見するのだ。ここにおいて、彼等は「自治」をもとめだす。すなわち有史以後の強権社会を排し、それ以前にあって人類が経験したところの自治社会を再び新しい形において求める強い欲求がここから芽生える。この「自治」への目ざめは、実に近世に至って人類がもち得た最も大なるものである。長い間の強権社会およびそれをもつ必然のピラミッド的政治組織は、商経済、分業、私有財産等の基礎の上に、必然に打ち建てられたものである。今やそれらのものが、消費者運動の発展、生産者運動の進歩、機械の進化による農工合体（分業主義漸滅）の機運の成熟等のために、ようやく崩壊し始め、芽生え始めていることは、もとより必然の現象であるといわねばならない。すなわち、崩壊しつつあるものは在来の強権組織であり、生起しつつあるものは来たるべき自治組織である。崩壊しつつある強権組織が、強権意識を伴うものであり、生起しつつある自治組織が、自治意識を伴うものであることは言うまでもない。

かくて社会的自覚は、それが、自治意識を伴うものである時にのみ、真のものであることがわかるのである。

婦人が強権を排し、自治をもとめる自覚において起ち上がったこと、すなわち真の社会的自覚において起ち上がったことは実に我々を以て鎗矢とする。かくて今や我々は、始めて

社会的に自覚せる婦人としてここに昂然と起ち、我々に襲いかかるあらゆる旧社会意識に対して、我々の婦人戦線を布設するのである。農民が真に農民として自覚した時、また、労働者が真に労働者として自覚した時、彼等は必然に、強権社会否定の意識をもつに至ると私は前にいったが、その如くに、婦人もまた真に婦人として自覚した時、彼女は彼女と強権社会との対立を意識するのである。

強権社会が婦人に対して為す第一の悪は、婦人の特殊的事実（月経、妊娠、出産、育児）に対する無価値観である。強権社会にあっては、これらの特殊的事実は私事と見なされ、いわゆる公事によってのみ各人の地位が評価される。故に強権社会にあっては、産院とか、育児所とかの設備の社会化されることによって、婦人の特殊の負担の幾分かが軽減せられるにしても、なお月経があり、妊娠があり、出産があることは、婦人の公事の生活を、それだけマイナスするものであり、従って公事によってのみ各人の地位の評価されることを原則とする強権社会にあっては、遂に、永久に、婦人の地位は、男子に比して劣るべきが当然なのである。

強権社会にあっては、婦人であることは、大いなる損失である。卑近なる一、二の例を挙げてみれば、資本家が婦人労働者の賃金平等主張に応酬する言葉としては、常に、「婦人は月経、妊娠等の特殊の欠点があつて、能率において、男子労働者と同視するわけに行かない」というにある。近頃、ソビエトロシヤで、「婦人にも男子同様の公務を与えよ」

という主張から、軍隊参加が要求されたに對し、国家が彼女達に与えた答えは、「それは許してもよい。がその代わり、月経、妊娠、出産等の欠点を婦人はまずなくすことから始めよ」というのだ。各人の地位が公務によつて評価される強権社会にあつては、婦人の有する先天的私事的負担は、すなわち常に一種の欠点であり、損失である。婦人はそのために、いわゆる公務の範囲が時間的にも（月経、妊娠、出産、育児等に費す一定期間は、生産層からの一時的没落を意味する。この一時的没落期間が婦人に限つて周期的に起つてくる）空間的にも局限せられると共に、その能率においても、常に男子の下位にあることから絶対に免かれ得ない。すなわち強権社会にあつては、婦人の地位が、男子に比して常に低い所以である。

強権社会における、この公事私事の差別的意識は、いうまでもなく強権社会特有の意識だ。「武士は食わねど高揚子」などと、食うという個人的事実、即ち個人の私事を、いかに賤しめたかということではこれでもわかる。また、「私情」に囚われるということは、従来男子の恥辱としたところであるが、その「私情」なるものは、主として婦人への愛、子供への愛等を意味されている。しかるに婦人は、その私情または私事的負担を先天的に負わされており、私情の部分（夫への愛とか、子供への愛等）は強いても無視するとするも、私事的部分、即ち特殊の生理的負担こそは、いかにするも否定できないのである。かくて、公事を重しとし、私事を軽しとする社会、即ち公事によつてのみ各人が評価される

社会にあつては、婦人は常に、永久に、ある程度以上には浮び上がることを得ず、そういう差別意識（強権社会特有の）に對して、真に自覺した婦人は、最も露骨な強権悪をそこに感ずるのだ。（然るにマルクス思想者間にあつては、従来公事私事の差別意識が維持せられ、またその婦人観にあつては、婦人の公事的生活によつてのみその地位は評価されるという在来の婦人観が採用されている。これ彼等が強権社会の使徒である以外の何者でもない証拠だ）

公事とは何か、それは支配階級を益するための労働であることを意味し、私事とは何か、それは一個人の食欲、性欲等の生活を意味する。支配者から見る時は、個人が食欲、性欲等を有しており、そのために非能率的（支配者にとつて）で、非生産的な物質的、精神的生活を営むことは、少しも支配者を益しないのみならず、支配者への奉仕率を低減する。さてこそ強権社会にあつて、公事の尊いとせられ私事の蔑視される所以である。

自治社会にあつては、社会的の生活と、個人的の生活とは、そうした分離した、矛盾したものとは考えられない。のみならず、社会的の労働すなわち社会的の協力作業は、各人の個人的の生活の自由（即ち各人の生存および生殖の自由、および相互扶助本能の自由）を確保するためになされるものであり、ここでは個人の生活がむしろ主人公として登場するのである。

かかる社会にあつてのみ、婦人は自由に生活し得られることはモルガン、マウレル等の

発見した古代自治社会（それは非常に幼稚でまた不純なものを含んだ社会であつたにもかかわらず）にあつて、婦人が非常に自由であつた事実に徴しても明らかである。

強権社会と婦人との矛盾の第二は、母性本能に由因する。「二十世紀は婦人と児童の世紀である」などといわれるごとく、婦人の自覚は、常に母性本能の自覚、従つて子供の自由および権利に対する自覚を伴つて起こってくる。

実際、母性が虐げられていた強権社会では、子供もまた虐げられていた。子供の出生は奴隷増加の意味においてのみ迎えられ、従つて産児制限などをも、その意味から禁ずる。しかしながら、産児制限が、悪質の奴隷を除き、優良なそれを殖やすために力があるとされる場合においては、直ちに禁を解くこともする。第一歩においてかく奴隷視されながら生まれた子供は、強権組織にもとづく変態社会の故に、自然の選んだ最も優良な育児の選手としての母性の手から、無惨にも引き離される。これが則ちこの社会の理想なのだ。

すなわち見よ。この強権社会の理想は、最も完全には、権力者階級（上級階級）の間のみ実現せられるが、その階級では、すなわち殆んどすべての母性は、子供から引き離されており、子供は乳母という母性ならざる婦人によつて育てられている。しかしてこの階級の、この変態的理想を、そのまま社会化すべく、プラトン以下多くの野心家が考えて来たのであるが、ボルシェビキも同じことを考えているのである。（社会が変態の状態から蘇つた場合にあつては、あらゆるすべてのことが、常態に復帰する。則ち「子供は母の手

で」ということは、考えて見るまでもなく常態の一つである。そして、その場合、社会は育児を母性の私事であるとはせず、ただ母性をその選手とし、社会はその母性の事業にあらゆる協力を惜しまないのである）かくのごとく、社会は出産を打算において迎え、保育を変態化し、さらに長ずれば、教育において、滅茶滅茶に踏みこむのである。強権社会の教育は、支配階級が自己権力維持のために用いる一つの手段でしかなく、従つてあらゆる教材の内容は、歪曲され、捏造されており、子供のもつひたすら求知心は、故意にその成長を妨げられる。（これに反して自治社会では、あらゆる思想、学理、主義が、常に批判と研究の材料として供せられる。かくて子供等は、その自由な求知心の発動によつてのみ、社会の進化過程を認識し、思想の合理不合理を判断する）かく、強権社会は実に多くの悪を子供等の上に加えるのだ。

婦人が真に自覚した時、そして当然、母性的の自覚が呼び起こされた時、彼女が第一にしなければならぬことは何であるか。それは強権社会に対して、決然と、手套を投げつけることだ。かくて母性の抬頭は、強権への抗議となり、闘争となり、勝利となる。すべての母性がその本性において目ざめ、起き上がるならば、そこには最早や従来「飼われためんどり」としての姿は掻き消え、母性本来の、強き女獅子としての勇氣ある姿において、すべての強権に對立し、「母性甦えり」の面目を躍如たらしめるのだ。母性ということが弱いということ、優しいということをのみ意味した時代は過ぎ去らねばならない。

今や母性こそは、最も果敢であり、勇強であらねばならない。

婦人が婦人として自覚した時、それは必然に強権社会への闘争となり、自治社会への仰望となることは、右に述べた少しの例によつても直ちに肯づかるべきことだ。ここにおいて、婦人は、始めて社会的自覚の第一歩を踏むのである。しからばその社会的自覚は、いかなる方法によつて、実現への過程を進るべきか。言いかえれば、我々の望む自治社会は、いかにして来たるべきか。

我々の意識の上に、「政治」が疑われ始め、「自治」が望まれたしたのは近世のことであるが、それ以来人々の注意はこの一事に集中された。人々は即ち「いかにして政治社会は出現したか」また「いかにして自治社会は来たるべきか」ということを研究しだした。その研究は多種多様であるが、人類が「政治社会」を否定し始め、「自治社会」を求めだしたという一事は確実である。人類の「意識」の上に現われ始めたこの共通の事実は何を物語るか。いわく、「意識」こそは予言である。即ち「政治社会」が廃止され、「自治社会」が来るべきことの予言である。「意識」は目に見えないあらゆる社会条件からの産物である。が故に、それは逸早く、そして正しく、目に見えない社会条件を反映する。即ち、「意識」が予言である所以はこの意味からである。来たるべき我々の社会が必然的に「自治」社会であるべきことは、最早や、明確に予想される。しからばその社会はいかにして

来たるべきか。

私有財産、商経済、分業等の上に築かれた従来の集権組織は、独裁と民主の繰り返えしであり、スメリヤ、エジプト等における「祭司」「王」等の独裁制から、下つてギリシャ、ローマ等における民主制となり、それに次いで歴山王、ローマ法王等の独裁制、そして再び近代民主制となるのであるが、この近代民主制の主なる特徴は、最下層者および婦人を取り入れたことである。が、それにもかかわらず、この民主制は、古代の民主制同様、結局、真の民主制ではない。「民主」の名のもとになされる支配者政治にしか過ぎない。すなわち「独裁」が露骨な支配者政治であれば、「民主」は欺瞞的のそれではないことが暴露した。ここにおいて、真の「民主」制は、民衆自身の政治、即ち、「自治」をおいてはかにはないのだ。

さらばこの「自治」なる組織はいかなるものであるか。モルガンによれば、有史以前の長い期間、人類の社会を組織づけていた「自治」制は、多くの自治コミュニティと、それを連結した同盟であつた。この制度は、その幼稚と単純にかかわらず驚くべきもので、軍隊も警察もなく、国王も貴族もなく、裁判所も監獄もなく、これで万事が秩序よく運んでいる。この共産社会には貧者と奴隷がない。

同じことはマウレルの研究にもあり、また、クロボトキンは「相互扶助」のなかで、そ

うした多くの例を挙げている。

これによつて見れば、我々の社会組織には、政治組織と、自治組織との二つの相反する組織があり、それが交替に起こってくるものであることが考えられる。政治組織を基礎づけているものは、私有財産、分業、商経済等であり、これの崩壊が始まるのと同時に、新たな自治組織が芽生える。それを我々の「意識」が反映し、そこに近世における政治否定、自治要望の自覚が現われてくるのだ。

政治社会（強権社会）は、そのピラミッドの頂点に座席をもつ少数幹部の専制社会であり、彼等は常に「大衆獲得」を心がけ、それによつて自己権力を維持しようとする。されば少数幹部の間には権力争奪の絶え間はなくとも、大衆に対しては「政治組織」に失望せしめず、「政治運動」から注意を逸さざらしむべく、どこまでも「政治運動」の太鼓をたたくことを怠らない。そのことある時代までは可能であつたのだ。しかしながら社会の経済的、様式的根低がすでに崩れかけた今日においては、果して政治運動が、しかく信じるに足るものであるか否かを、人々はようやく疑いだした。

幾世紀間、人々はかつてその属する社会の組織に疑いをもたなかつた。小集権の割拠せる封建社会から、それが大集権へと統一された近代社会を通じて、常に共通の「集権」というその政治組織を唯一のものと信じていた。そして彼等は、彼等の生活の自由は、「政

権獲得」を通じてしか得られないものと考えていた。かくて歴代の民衆は、独裁制にあつては応々、古い権力者を捨て、新しい権力者を支持することを繰り返した。民衆は新しい権力者の「良き政治」を期待した。が、この繰り返しは無駄であつた。古いも、新しいも、結局は権力者であり、搾取者であるに過ぎなかつた。また民主制にあつては、人々は一票の自由を獲得するため（即ちいう所の政権獲得のため）の運動によつてのみ、自由が得られるという夢を抱いてきた。彼等は血まみれになつて、それを獲得したが——ローマの民主制では、獵師や農夫等、下層の者がその運動を起こして、戦い取つたこともあるが、一度戦い取つたからといって、決して永久にそうではない。次の瞬間には再び奪われている。この繰り返しを一つづつ、人々はなお「政権」運動においてのみ自由は得られるという考えに囚われてきた。この「政権」運動こそ、強権社会における「民衆のもつ唯一の運動」であつた。

しかるに、ごく近代、即ち我々の意識の上に「自治」社会が望まれ始めたのと前後して、突然、風変りな、即ち「政権運動」でない、全然新しい別の「民衆運動」が発生したのである。即ち「労働組合運動」であり、「消費者組合運動」である。いずれも無智な無産者が、自然的に生んだ運動であつて、初めは非常に微力であつたが、一、二世紀の間に、驚くべき成長を遂げ、また遂げつつある。労働者組合運動は、大いなる破壊的、消費者組合運動は、建設力の力をもつといわれ、相俟つて有史以後の政治社会の特産物として発展

しきたった「商業」を廃絶し、「自給自足の自治社会」を予想するものであるが、さらにこれが「農民」の中に取り入れられた時において、我々はそこに新自治社会建設の総合的典型を見出すのである。農民はごく自然に地域的根拠によつてゐる。そこから始まる「自治コミュニティ」とその連合への建設運動は、それが成育につれて、有史以後の社会および特に資本主義社会において最後の力を振りつつある「商経済」を死滅せしめる。すなわち、「商経済」は、実質階級（生産階級）に寄生することによつて成立した厩気楼でしかないからだ。

すべての自治運動こそは、すべてのそれらの寄生者を否定する運動である。寄生者にとつてはこの「自治」なる言葉ほど恐ろしいものはない。しかしながら、彼等といえどもその「正」しいことを認めないわけには行かない。「強権」よりは「自治」の正しいことは、もはや近世にあつては、いかんともしがたき常識である。さればこそ彼等は「過程」ということを持ちだして、民衆の自治への自覚を、はぐらかそうと企むのだ。彼等はそれをもつともらしくするためには、例えばブルジョア学者は、煩瑣哲學的の觀念的あるいは唯物的思弁論をもつて臨み、一部のエセ社会主義者は破綻だらけであるところの生産進化説を振りまわしているが、それをみても、いかに彼等寄生者群が、民衆の自治（それは彼等を振り落とすことになる）を本能的に恐怖しているかが分るのである。

しかも、それらの思弁論者たると、進化説者とを問わず、彼等が「実行運動」として採

用する手段は、幾世紀間、民衆が繰り返してきた「政権を通じてのみしか自由は得られない」という、その依然たる繰り返しなのだ。

しかしながら、民衆は最早や、古い「政権運動」を捨て、新しく起こった「自治運動」、即ち労働者組合運動（職業者組合運動）および、消費者組合運動、農民組合運動等によつて起つ。

これらの新しい組合運動は、ごく自然にそれぞれの役割（破壊的、または建設的）をもつが、帰するところは、自治コミュニティの連合社会であり、そこを目がける種々の分野戦である。

実に、これらの諸組合運動こそは、近世特有の真に新しき一大民衆運動の種々相であるが、この運動を進める上に、古い「政権運動」が、いかに妨げとなるかは実例の示す通りである。

例えば労働者組合運動に政権運動が寄生して以来、組合は散々に分裂し、争議は振わず、ゆえに労働者の威力は見くびられている。たまたまの争議においても、政党ないしはそれに付き物のダラ幹どもの野心の、それに作用していることが、その争議を不純にし、弱めるのだ。（ダラ幹なるものは個人的悪ではなく、すべての政治組織においては、すべての幹部は、全部残らずダラ幹ならざるを得ない仕組の上におかれている。それが即ちこの組織の正体であつて、この組織は、あくまでも万卒死んで一将の名を輝やかす、即ち少数者

のために万人が踏台にされる仕組みなのだ)

また、同じことは農民運動にもいえるのだ。青森、新潟地方の農民たちが、政治反対の声を挙げたことも、このことに起因する。政権者の熱心なるごまかし(彼等が熱心なのは彼等自身の生きるか死ぬかの問題がそれだからだ)によって、いくたびか宥められ、駆り立てられている彼等であるが、もちろんその状態は長くは続かない。

消費組合運動とてもそうなのだ。ベルギー消費組合が無産政党に傾わされて、その運動を全然に無力にしていることは誰も知っている通りだ。

わが国においても、既成政党および無産政党によって、今や消費組合がその政治的経済的踏台とされつつあり、かくてわが国消費組合運動は、芽生えのうちに分裂し、踏み荒されつつある。イギリスのロッヂデールがあれだけ大きなものになったことは、政治に関係しなかったことからきているといわれるが、それにしても、その態度が単なる「中立」であつて、「否定」でなかった結果、今や政治の渦中に巻き込まれ、ベルギーの二の舞を演ずるか、または、御用墮落組合と化し、それによって崩壊の過程を辿るかの何れかであるうと見られている。

かく、「政治運動」は、すべての「自治運動」と常に矛盾し、常にそれを「発達させまい」とする本能を、組織的にもっている。今や我々はこのことを、はつきりと見抜くことによって、断然それと絶縁し、真に自主自治的に我々の運動を押しすすめて行かねばなら

ない。

それらの運動の自由な、従つて大きな発展の彼方にのみ、我々の新社会は、必然に展開する。すなわち我々は、すべてのかかる「自治運動」においてのみ、新社会の展開することを強く確信する意識において一致するところの「同一根拠」と、来たるべき我々の社会は自治コミュニケーションの連合社会であるとする「同一目標」によって、集団的、個人的、あらゆる分野における戦いを戦うことが、我々のとるべき手段であると信ずるのだ。我々は今日、境遇的にあらゆる分野に分散させられている。従つて我々はその各々の境遇に応ずる各々の戦術と、そしてそれに関する各々の異なる能力をもつ。我々は我々にとって、最も必然であり、最も有能であると信じられる各々の道をとつて進むことが、結果的に、新社会建設への最良の手段であることを知る。

かくて我々は、今や「婦人」としての分野から、しかして「思想文芸運動」の分野から、思想啓蒙、文化建設(我々の社会の)の任務を、つくさんとするのだ。

文化建設——我々はこれについて一語を費さねばならない。このことは或る人々には非革命的であるかの如く思われる恐れがある。文化建設とは何か。一言にしていえば、それはあらゆる新発見への道、あるいはまた新発見への道である。我々は非常に多くの科学的、または哲学的発見と、発明とを伴つて進んで行かねばならない。それらの発見と発明とがいかにか我々の社会建設に関して、有要なものであるかを、我々は知らねばならない。

十九世紀産業革命は実に十五、六世紀の、あの盛んであった文芸復興（科学復興と呼ばれ、学芸復興ともいわれている）に源している。あの自由な、あの盛んな文学期において、人々は量り知れぬ未知への冒険心、探究心を養った。それは各方面に発露して、あるいは大陸の発見、あるいは科学から、ひいて機械の発明となつて、遂に産業革命を生んだ。かく近世の新社会はあらゆる新文芸、新学理、ひいて新大陸、新機械等の発見と発明との交響樂によつて、また、それと人間生活の政治的経済的内部矛盾の発展との総合の上に築き上げられたのである。

しかしながら、かかるほうはいたる飛躍的、求知的の進行曲は、あらゆる創造への強き冒険心と好奇心との「擁護」され、「支持」される時代もしくは環境においてのみ奏でられる。文化という言葉、「創造」という文句にすらも、神経を尖らし、正か否かとおののき恐れる、固縮せる、末梢的、公式主義的雰囲気からは、決していかなる偉大な発見も発明も期待することは出来ない。我々は今や、そうしたこじれた、うるさい、時代末的現象を、大きく飛び超えねばならない。また、かのフランス革命前の貴族文学が、いかに公式主義であり、せせこましい批評心にのみ長けていたかを知っている我々は、そうしたことは、すべて全然我々のものでないことを断言しうる。

自由に探求し、自由に科学し、自由に創意する。これ我々のとるべき新文化建設への必然の態度であらねばならない。

以上、挙げ来たった婦人として、社会人としての、我々の態度が示すごとく、我々は決して単なる「婦人」団体として集まつたのではない。すなわち、我々は全社会的運動の、あらゆる意味における果敢な一翼として起ち上がったのだ。

途は遠い。歩みは険しい。狂暴な弾圧は直ちに我々の頭上に下るであらう。また我々の不安な経済力は、常に我々を脅やかすであらう。だが、我々の運動——我々によつて点火されたところの——は、もはや全世界的、全人類的のそれである。それは必然に燎原の一大火災となるべく、必至の勝利を目掛けて燃え進むのだ。